

令和7年度 入学試験（一般 第4回）問題

国語

受験番号		氏名	
------	--	----	--

- 指示があるまで開かないこと。

令和7年2月22日(土) 9時00分 ~ 9時45分

【注意事項】

- 試験問題の数は27問です。
- 問題用紙及び解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入してください。
解答用紙は下記の記入例をみて記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙にマークしてください。問題用紙に記載しても無効です。
なお、解答用紙には解答欄が50問までであるので注意してください。28問以降にマークしても無効です。
- 試験問題にはすべて5つの選択肢があります。質問に適した選択肢を選び、その番号を解答用紙にマークしてください。
なお、2つ以上マークした場合は無効となります。

【解答用紙マークシート記入例】

フリガナ	セイ トウ ハナ コ	年	月	日	国語
氏名	聖 灯 花 子	7	2	22	

〔受験番号記入例〕

番 号		問	解 答 欄	問	解 答 欄
	32001	1	① ② ③ ④ ⑤	11	① ② ③ ④ ⑤
①	①	2	① ② ③ ④ ⑤	12	① ② ③ ④ ⑤
②	②	3	① ② ③ ④ ⑤	13	① ② ③ ④ ⑤
③	③				
④	④				
⑤	⑤				

マーク例

良い例	悪い例
●	☑ ○ ●

※番号欄には、右づめで受験番号を記入し、該当部分の数字をマークしてください。

令和七年度 入学試験（一般 第四回）問題（国語）

一次の文章を読んで、後の【1】～【5】に答えなさい。

小説の内容がたとえフィクションであっても、扱う素材の基本調査は欠かせない。そのため大きな薬液のみたされた医科大学の槽に入っている死体の群れを眼にしたり、介護疲れで夫を殺した老女の裁判を傍聴したりもする。関与者に会って話もきくが、私が初めて多くの人に会ったのは、『戦艦武蔵』という戦史小説を書いた時だった。八十七人という数をおぼえているのは、その都度いただいた名刺を保管していたからで、造船技師やその関係者、艦の乗組員たちであった。

その小説を書いた頃は、芥川賞候補に四回推された身ではあったものの、いわば無名の新人で、私は、一人で長崎をはじめ各地におもむいて関係者に会い、資料を収集した。前年まで会社勤めをしていた私は、退職金をこの旅で **①** 費消した。

この四百二十枚に及ぶ小説は、文芸誌「新潮」に発表されはしたが、正式の依頼ではなかった。私が重工業関係のPR誌に戦艦武蔵について書いていた連載エッセイに眼をとめた、新潮社の著名な編集者斎藤十一氏が、「新潮」の編集者を介して、私に書く気はないか、と打診してきたのだ。

私は、自信がなかったものの、書くことにきめ、本格的な調査に入った。それは私単独の調査であり執筆であった、旅も私一人であるのは当然であった。

かえりみると、この経験がその後の私の小説の素材にかかわる調査を決定づけたと言っている。『戦艦武蔵』について『高熱隧道』^{すいどう}という長篇小説を書いたが、黒部第三ダムの隧道が素材であっただけに、工事現場に入ったり富山市その他で関係者に会うことを繰り返した。その調査も協力者などなく、私はただ一人で歩きまわった。

なんの不思議もなかった。小説は私が書くものであり、必要があるから調査をするのであって、そのために各所をまわり、手土産を持って人に会い、資料を収集していたのだ。

沖縄戦の十四歳の少年兵を主人公にした長篇を書いた時には、一カ月半那覇に滞在したし、『陸奥爆沈』と題する小説を書下した時も、諸所方々に旅をつづけながら関係者に会うことを繰り返したが、これらの作品も、すべて私の単独作業であった。『陸奥爆沈』が出版された年の暮れ、「別冊文藝春秋」の編集者が拙宅に訪れてきた。私は同誌に、『三色旗』という長崎で不法行為をおかしたイギリス軍艦「フェートン号」を素材にした小説を発表していた。なぜ訪れてきたのか不審であったが、編集者は、五万円の入った紙包みを差出し、「取材費の補いに……」と、言った。

私は驚き、呆気にとられた。『三色旗』は私の仕事であり、原稿料も支払われるはずで、単行本におさめられれば印税も得られる。取材費などはその一部にすぎず、もういわれはないのだ。

私は固辞したが、その記憶があるだけで、もしかすると、使いに来た編集者の **②** を考え、受取ったのかも知れない。

その頃、私にとって初めての新聞小説の依頼が朝日新聞社からあった。当時、人類初の心臓移植手術がはじめられていて、それを素材にした小説を書いて欲しいという依頼であった。海外への調査が不可欠で、会話の不得手な私にフランスに留学歴のある編集部員が同行してくれ、旅費もあたらえられた。

まず世界初の心臓移植がおこなわれた南アフリカのケープタウンに行き、さらに私は、その部員と別れてロンドンを経由してニューヨークに行き、第二、第四例の手術をおこなった病院で調査し、帰国した。

その後、日露戦争の講和会議を『ポーツマスの旗』という新潮社の書下し小説に書くためアメリカのポーツマスにおもむいたが、その折は一人旅であった。

この二度の海外調査で朝日新聞社と新潮社から旅費を支給されたが、なんとなくいわれのないお金を受取ったようで落着かなく、今でも胸にわだかまっている。

そんなこともあって、私は一人旅に一層徹するようになった。自由に振るまいたいという気持ちからであった。たとえば、『生麦事件』という小説の冒頭で、馬に乗ったイギリス商人たちが薩摩藩の大名行列に接触した場

面を書いた。激怒した藩士が抜刀して商人の一人の脇腹を斬り払い、さらに肩先から斬りあげた。

その場面を書き終えた私は、馬上の商人を肩先から斬り上げられるはずはないことに気づいた。馬はアラブ系の大きな馬で、その上に乗る商人の肩に刀をのぼすことは不可能に思えた。その疑問を解くため、私はすぐに航空券を予約し、鹿児島へむかった。

小説を書く場合、このようなことの連続で、私は意の **㉔** どこへでもおもむき、調査をする。雑誌、新聞への連載小説の依頼を受ける時、「協力を惜しみませんから、何事でもおっしゃって下さい」と、言われるのが常だ。担当の編集者が、調査の旅へも同行し、手助けをしてくれるという意味である。

『深海の使者』という連載小説を「文藝春秋」に連載したことがある。同盟国であるドイツとの連絡は制海・空権が連合国側に支配されていたので、潜水艦による方法以外になかった。そうした素材であるだけに、私は各地に旅をし、多くの人から証言を得た。

その小説をほとんど書き終えた頃、親しい同社の編集者から、「なぜ一人で旅をするんですか。担当の若い編集者がつまらないと言っていますよ。どのように調査するのか、若い者にも見せてやって下さいよ」と、言われた。会社勤めをした経験のある私には、実によくわかる言葉であった。社の費用で未知の地に旅をすることができ、それは得がたい楽しみであるはずだった。そうしたことから、編集者に同行してもらったこともあるが、それはきわめて稀なことであった。

妙なことも起った。九州の日田市に史実調査におもむいた時のことである。

あらかじめ市の教育委員会に電話をし、市に行く目的も告げて出掛けていった。市役所に行くと、課長が応対してくれて、若い男女の課員を案内役に命じ、私は市内を歩きまわった。

夕刻になって、二人の労をねぎらうため料理割烹店に行き、酒食を共にしたが、しばらくして打ちとけ合った頃、男の課員が思いがけぬ打明け話をした。

課長が、私が小説家と称しているが実はその名をかたっている **㉕** が大きく、注意してつき合え、と言ったという。新聞に小説を連載している身ならば、当然、新聞社の編集部員、出版社の編集者が同行しているはずだが、単独であることがおかしく、小説家をかたっているとしか思えない、と。

私は、笑った。旅行をして一人で小料理屋で酒を飲んでいる時など、警察関係者、土建業者によくまちがえられるが、私には小説家らしい要素は全くみられないらしい。

「本人ですよ、まちがいません」
私は、二人に笑いながら強調した。

その後も、私は一人で調査の旅をつづけている。それが私のこだわりと言ってよく、私はそれが気に入っているのだ。

(吉村昭『一人旅』)

【1】 空欄 **㉕** に該当する語を、それぞれ **①** ～ **⑤** から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 **1** **2**】

- | | | | | | | |
|----------|----------|------|------|-------|------|------|
| 1 | ㉕ | ① 職務 | ② 思い | ③ 立場 | ④ 地位 | ⑤ 役目 |
| 2 | ㉖ | ① 確率 | ② 恐れ | ③ 見込み | ④ 公算 | ⑤ 割合 |

【2】 二重傍線部「費消した。」の前に置く **㉗** として正しいものを、**①** ～ **⑤** から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 **3**】

- | | | | | | | |
|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 3 | ㉗ | ① おしみなく | ② ことごとく | ③ てらいなく | ④ すべからく | ⑤ よるべなく |
|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|

【3】 二重傍線部「意の」に続く **㉘** として正しいものを、**①** ～ **⑤** から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 **4**】

- | | | | | | | |
|----------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 4 | ㉘ | ① ままに | ② ごとく | ③ ゆえに | ④ とおり | ⑤ ために |
|----------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|

【4】 この文章の作者・吉村昭の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問5】

- 5 ①『破獄』 ②『天狗争乱』 ③『関東大震災』 ④『巖嵐』 ⑤『破戒』

【5】 波線部のように記した筆者の思いとしてふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問6】

- 6
-
- ① 仕事であれ余暇であれ、旅の本質はやはり一人旅のなかにこそある、という思い。
② 人の援助や親切に感謝しつつも、一人旅の魅力にはどうしても抗えない、という思い。
③ 人生における最も大切なことを知るためにも、一人旅の効用は極めて大きい、という思い。
④ 奇異に見えても、旅への自分の捉え方にはそれなりの自信と誇り、至福感がある、という思い。
⑤ 旅に対する独自の考えを持つことこそ、旅の本質に迫る唯一の道だ、という思い。

二次の文章を読んで、後の【6】～【10】に答えなさい。

月見草の咲く頃になると、私は彼女に逢いに山間の沢に螢を見にいかねければならないような気分になる。

その少女はよい酒の湧く霧の深い盆地の山裾にある森近という名の村に住んでいた。バス通りから二十分も小径を登った丘にある彼女の家の脇には小さな沢が流れていて、彼女の祖母がよく米をといだり野菜を洗ったりしていた。口に[A]、そのまま飲み下したくなるほどの甘いきれいな山の水だった。

彼女の家には古い深い井戸があったが、その井戸はあまりに深くて、覗き込むとはるか遠くに小さく光った水が見え、小石を落とすと、ぽああんと地の底に笈した。だから彼女の家の人たちは、飲み水だけをつるべを手繰って井戸から汲み上げ、その他の用水はその沢の水を使っていた。

彼女は年老いた祖父母と一緒に住んでいた。彼女が幼い頃父親が死に、母親は彼女を連れて遠い他国の都会で再婚した。しかし彼女が女学校に入って間もなく母親も死んだ。

彼女の義父は新しい妻を迎え、亡くなった妻の残した血のつながりのない娘を、森近の祖父母の家に返したのだった。

彼女は死んだ父親の生まれた森近の家に帰って来たが、もちろん祖父母の顔も覚えてはいなかった。彼女が遠い都会の義父の家から森近の家に帰って来たとき、祖父母は彼女にむかしのことを思い出させようとして言った。

「少しぐらい何か憶えているだろう？ ほら、あの井戸のそばにある杏の木に実がなると、いちばん先にお前にやったものだ。それから、ほら、その沢でお前は一日中沢蟹を採って遊んでいた。お祖父さんはお前に木切れで小さな水車をつくってやったよ。それからお祖母さんは笹舟をつくって流してやった」

しかし、彼女は全く何も憶えていなかった。森近を去った頃、まだ三歳にもなっていないから。

「きっとそのうち、何か思い出すわ」

彼女は長い睫毛を伏せて悲しげに詫びた。

「お前はよく喋る明かるい子だったよ。どうして？ どうして？ なぜ？ ってひっきりなしに訊くんだった。それなのに、何も憶えていないのかい」

祖母はがっかりして首をふった。

その頃、日本は長い長い戦争をしていた。うんざりするほど長い戦争を。少女がもの心ついたときから戦争をしていないときは一日もなかったので、少女は戦争でない状態がどんなものなのか想像することができなかった。

「わたしが憶えているのは、日本がいつも戦争をしていて、いろんな人たちが死んだことばかりだわ」

彼女は軍神となった英雄たちの葬儀に小学生として参列したことなどをよく憶えていた。

「わたしのお父さんも死んだけれど、人はみんな死ぬんだわ、そう思って、軍楽隊の演奏する音楽を聞いていたの」

彼女は私に言った。

彼女の父は戦死したわけではなく、肺結核で死んだのだった。その頃、その病気は死病に近いものとされていた。彼女はまだほんの少女なのに、その黒い髪には目立つほど銀色の白髪が混っていた。結核体質にそういうのが多いというようなことを言う人もあり、彼女は父親の体質を受けていると私に囁く者もいた。熱っぽいうるんだ眼と、じつとりと汗ばむような膚で、喘ぐようにものを言う彼女にはなるほどそんな気配があった。

彼女が祖父母の家にやって来たのは、土筆や蓬の頃だった。私たちは陽だまりの土手で、春の野草を摘みながら、東京に大空襲があったことなどを語った。私も彼女もそれまで住んでいた東京が焼野原になってしまったさまを想像することができなかった。

しかし、私たちがその街を去って以来、その街はもはや私たちの目の前にはないのであるし、焼野原になっているにしても、また、もとのままであるにしても、私たちにっては同じことなのだといった妙な[B]を二人とも感じていた。

やがて菜の花の季節も過ぎ、麦畠が黄金に稔り、田植も済んで、夏草の間に青大将のぬめりが[B]、月見草の咲く頃になった。

日本列島の都会らしい都会は次々に空襲に見舞われたが、この山間の村の上空を銀色の翼をきらめかせるB 29

の編隊は隊伍をくずさずに通り過ぎるだけだった。

戦争を早く終結させるべきだというような敵方の書いたビラが飛行機から撒かれたとか、それを拾った人を憲兵が追っているとかいうような話が流れて来たりした。

そんな年の夏のある宵、私たちは沢沿いに山径を登っていた。山間の段々になった水田の上を、ぼっぼっと明滅する青い光がとび交っていた。

螢だった。沢の淀む辺りには、流れる星がわっと群れるように、無数の螢が乱舞して、私は何かに襲われる怯えを感じた。狂うように舞い出た螢を、彼女は立ち止まってじっと見つめていた。そして、闇の中で呟いた。

「わたし、思い出したわ。ずっとむかし、たしかにここで、この沢で、こういうふうには飛ぶ螢を見たことがあったのを。わたしがいつも思い出そうとして、思い出せなかったものはこれだったんだわ。お母さんが死ぬとき言ったのよ。ほら、人の魂が飛んでいる、って。ぼっぼっと飛んでいるのを、いつか森近で一緒に見ただろう、とそう言ったのよ。ほら、あんなに、たくさん、——こんなに、た・く・さ・ん。寂しいことなどないのよ、こんなにたくさん死んだ人たちの魂が遊んでいるんだからって。

でも、わたしは、そのお母さんの讒言を聞いて、夢にうなされているお母さんが人魂を見て、そんなことを言っただんぞと思ひ、お母さんがこの沢の螢のことを言っているのだとは思わなかった。彼女は舞い光る螢の灯を両手で抱きかかえる仕草で歌うように言った。

「ほう ほう ほおたる こい

こっちの水は ああまいぞ

ほう ほう お父さん

ほう ほう お母さん

ほう ほう ——

彼女は少し休んでつけ加えた。

「ほう ほう みいんな いっしょに

飛んでこい

わたしも一緒に 飛んでゆく」

一緒に飛んでゆくと言われて、私はぎょっとして闇の中で動物の瞳のように光る彼女の二つの眼をみつめた。

「お母さんが飛んで来て、思い出させてくれたのよ」

彼女は喜々として言った。

それから、その年の夏の間中、宵になると沢のほとりに立って、螢を見つめている彼女の姿を、私は何度か見かけた。私たちの家は隣同士だったから。月見草が闇の中に白く浮かぶ頃になると、彼女の黒い影が沢のほとりに見えた。沢に群らがって辺りがあかるくなるほどの異様な螢の大群のかざす火は、私にはこの戦争で死んだ人たちの数限りない靈魂が迷い出たもののように思えた。

その夏の螢の火が弱々しくなる頃、長い戦争はやっと終り、私はその村を去った。

戦後の混乱期に、たった一度、戦争中の疲れが出て体の調子が思わしくないと書いた文面の手紙を最後に、彼女から ① はなかった。

或る日、私は、森近のあの沢に首をさしのべるように咲いている月見草に螢が一匹止まっている夢を見た。淡い光でまたたく螢に私はうすら寒さを覚えて目が醒めたが、翌日、彼女が肺結核で死んだという風の便りを受けた。

- 【6】 空欄㉠に該当する語を、それぞれ①②から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問7 8】
- 【7】 ㉠ ①寂しき ②切なさ ③虚しさ ④哀しさ ⑤侘しさ
①消息 ②返信 ③連絡 ④音信 ⑤音沙汰

【7】 二重傍線部「口に」に続く㉠として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問9】

- 【9】 ㉠ ①含めば ②充たせば ③浸せば ④包めば ⑤移せば

【8】 二重傍線部「ぬめりが」に続く㉠として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問10】

- 【10】 ㉠ ①ひそみ ②よぎり ③たどり ④うかび ⑤はしり

【9】 この文章の作者・大庭みな子の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問11】

- 【11】 ①『三匹の蟹』 ②『海にゆらく糸』 ③『津田梅子』 ④『恍惚の人』 ⑤『赤い満月』

【10】 波線部のように記した筆者の思いとしてふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問12】

- 【12】
- ① 蛍に姿を変えて彼女が私のもとに来てくれたのだと考えると、悲しくてやりきれない、という思い。
② 悲しい結末にはなったが、彼女との楽しかった日々を決して忘れることはない、という思い。
③ 戦争に翻弄された二人の人生だったが、大切な心を見失わずにいられて幸せだった、という思い。
④ 人生のはかなさを胸に刻み、彼女の分までしっかりと生きていかなければ、という思い。
⑤ こんな辛い便りを受け取る前に、どんなことをしてでも捜して訪ねるべきだった、という思い。

三次の【11】～【15】の傍線部の読み方として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【11】 「この作家は、残念なことに、昨年、天折してしまった。」【解答欄は問【13】】

- ①あやせつ ②ようおれ ③あやおれ ④ようせつ ⑤あやおり

【12】 「今朝、その患者は、頗る元気だった。」【解答欄は問【14】】

- ①いたぶ ②すこぶ ③えらぶ ④たかぶ ⑤くすぶ

【13】 「ここはやはり、定石通りの作戦でいこう。」【解答欄は問【15】】

- ①じょうせき ②ていこく ③じょうしゃく ④ていせき ⑤じょうこく

【14】 「そこに陥穽があったことに、彼は気づかなかった。」【解答欄は問【16】】

- ①かんろう ②おちせい ③かんせい ④おちろう ⑤かんおち

【15】 「おかげで、幸先のよいスタートがされた。」【解答欄は問【17】】

- ①こうさき ②さいさち ③こうせん ④さちさき ⑤さいさき

四 次の【16】～【20】の記述のなかの□に用いる言葉としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【16】 「今年の冬□は、かなり手強かった。」【解答欄は問【18】】

- ①執事 ②將軍 ③総裁 ④軍曹 ⑤総督

【17】 「彼もいよいよ、年貢の□時だ。」【解答欄は問【19】】

- ①渡し ②纏め ③外し ④流し ⑤納め

【18】 「いつも通り、彼女のプレゼントは、立て板に□だった。」【解答欄は問【20】】

- ①酒 ②渦 ③茶 ④水 ⑤泡

【19】 「この魚は、とりわけ夏に、足が□。」【解答欄は問【21】】

- ①遅い ②強い ③早い ④弱い ⑤固い

【20】 「ここはやはり、亀の甲より年の□だね。」【解答欄は問【22】】

- ②劫 ②考 ③興 ④講 ⑤抗

五次の【21】～【25】の作者と作品の組み合わせで、正しくないものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【21】
【解答欄は問 23】

- ① 谷崎潤一郎『夜明け前』
- ② 川端康成『山の音』
- ③ 野上彌生子『迷路』
- ④ 菊池寛『恩讐の彼方に』
- ⑤ 梶井基次郎『檸檬』

【22】
【解答欄は問 24】

- ① ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』
- ② ジェーローム・D・サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』
- ③ アルベール・カミュ『ペスト』
- ④ ハーマン・メルヴィル『白鯨』
- ⑤ レフ・トルストイ『ハムレット』

【23】
【解答欄は問 25】

- ① 大江健三郎『万延元年のフットボール』
- ② 大原富枝『婉という女』
- ③ 遠藤周作『海と毒薬』
- ④ 三浦哲郎『坂の上の雲』
- ⑤ 宮尾登美子『序の舞』

【24】
【解答欄は問 26】

- ① 新美南吉『手ぶくろを買いに』
- ② 宮沢賢治『ビルマの豎琴』
- ③ 松谷みよ子『龍の子太郎』
- ④ 浜田廣介『泣いた赤鬼』
- ⑤ 小川未明『赤い蠟燭と人魚』

【25】
【解答欄は問 27】

- ① ミヒヤエル・エンデ『魔法の学校』
- ② オー・ヘンリー『最後の一片』
- ③ ジーン・ウェブスター『長くつ下のピッピ』
- ④ アルフォンス・ドーデ『最後の授業』
- ⑤ チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』

27